

# 日本記者クラブ会報

第 442 号  
2006 年  
(平成 18 年)  
12 月 10 日発行

〒一〇〇〇〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
http://www.jnpc.or.jp

## 「ニュースは内幸町から」が実る

企画委員長 宇治 敏彦

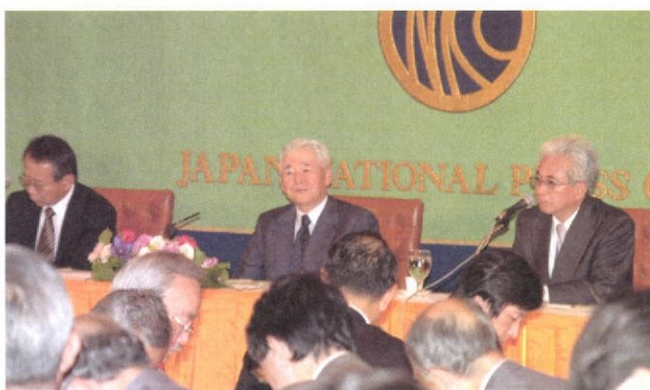
当クラブの今年のビッグイベントは、5年半ぶりの自民党総裁選候補討論会(9月11日)でした。安倍晋三氏優位の中で消化試合と揶揄された総裁選でしたが、討論会は企画委員各位の努力で安倍、谷垣、麻生3候補の手柄や政策を浮き彫りにすることができました。参加者数は315人と今年のトップでした。

福井俊彦日銀総裁の昼食会(6月20日)も、村上ファンドへの巨額出資問題の渦中で行われたために258人が出席(ベスト2)。小生は企画委員長として司会を務めました。冒頭で「総裁にとっては最悪のタイミングかもしれませんが、当クラブには最高のタイミングになりました」と挨拶させていただきます。裏話を披露しますと、昼食をとって

いる間に福井総裁から一つのご下問がありました。日銀事務当局は金融政策をしゃべったあと村上ファンド問題の釈明をする手順を想定しているが、「それでいいでしょうか」というお尋ねでした。

「それは逆になさるべきです。ここに集まっているジャーナリストたちは何よりも総裁の村上ファンド投資への釈明を聞きたいので冒頭に釈明をなさってください」と申し上げました。幸い総裁も小生の提案を受け入れてくださり、そのように運んだのですが、それでよかったと思いません。日銀事務当局の筋書き通りに講演していたら、福井総裁への失望感はもっと大きなものになっていたに違いありません。

6月に町田頭最高裁長官(当時)



クラブにとっては「最高のタイミング」だった福井日銀総裁昼食会 右から司会の宇治委員長と左端は小孫企画委員(6.20)

に登板いただいたのも特記すべきことです。これでクラブ創設以来の懸案だった三権の長の会見が実現しましたが、滝鼻理事長が直接最高裁で町田長官にお願した結果です。同理事長の「ニュースは内幸町の日本記者クラブから」という目標が実った一例です。

5月の総会記念講演にお招きした

藤原正彦氏(『国家の品格』の著者)の話も刺激的でした。低下した日本人の知的水準を回復するには「1にも2にも国語」という講演に刺激され、企画委員会では日本語の勉強会を立ち上げることを決めました。山口仲美埼玉大教授の「日本語の歴史」、石川忠久漢字文化振興会専務理事の「漢字文化の現状と今後」などが好評を博しました。秋の新聞大会でも活字文化振興への当クラブの試みを紹介しました。

各国首脳の招聘もエンフボルド・モンゴル首相(3月)、パロージエU委員長(4月)、アナン国連事務総長(5月)、カルザイ・アフガニスタン大統領(7月)、ズン・ベトナム首相(10月)などを実現し、ナショナルプレスクラブの役割を果たせたのではないかと自負しています。

恒例の予想アンケートは設問が厳しかった(的確だった?)こともあり満点回答はゼロ。特にサッカーW杯のイタリアを当てた人はわずか3%。安倍氏優位の総裁選も正答率は56・7%でした。その意味では会員各位のジャーナリストとしての「予知能力」が厳しく問われた1年であったかもしれない。

(中日新聞社専務取締役東京本社  
代表) 東京新聞



2006  
私のお薦めの本  
3冊

年末恒例の「推薦書」企画。ことしは女性会員11人にこの1年で印象に残った3冊を選んでいただきました。年末年始の読書の参考にいかがでしょうか。

川名 紀美

(朝日新聞論説副主幹)

- ① 格差社会 何が問題なのか 橋木俊詔 (岩波新書)
- ② 私、バリバリの認知症です 太田正博ほか(クリエイツかもがわ)
- ③ 夢見つつ深く植えよ メイ・サートン (みすず書房)

「格差があるのは悪いことではない」。小泉前首相は言った。いまや、「格差は見せかけ」と言いきるめるのが不可能なほどに、貧しい一人暮らしの高齢者や若者が増えていく。著者が提示する処方箋が考える手がかりをくれた。病んでも傷ついても、人は生きていく。偶然の場所に励まされ、かわった人々に支えられながら。老いていく自分から目をそらさず、孤独と向き合ったとき、一条の光がさしてくる。

青野 由利

(毎日新聞論説委員)

- ① バイオポリティクス 人体を管理するとはどういうことか 米本昌平 (中公新書)
- ② 日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界戦争 速水融 (藤原書店)
- ③ ビッグバン宇宙論 サイモン・シン (新潮社)

ES細胞ねつ造、代理出産、病気腎移植など、生命科学をめぐる事件は後を絶たない。①は「人体利用」を考える際の指標を与える。新型インフルエンザも気にかかる。1918年にスペイン風邪が流行した当時の日本の様子が②で初めてわかった。今年のノーベル物理学賞はビッグバン理論を裏付ける観測に授与された。③は科学者の宇宙への情熱と人間くささを描き、天文学のだいご味を再認識させられる。

河野 博子

(読売新聞編集委員)

- ① 在日の耐えられない軽さ 鄭大均 (中公新書)
- ② 昨日の戦地から ドナルド・キーン編(中央公論新社)
- ③ 外交敗北 重村智計 (講談社)

私小説風に、ミクロの穴から歴史の転換点を見つめる書物には、迫力がある。①は、従来の枠組みを越えた韓国・朝鮮・日本理解の必要性をつきつける。個人史という痛みを伴う作業を通じて提示されるものは、重い。②は、戦争責任など昨今論議を呼んだテーマを含め、現在の日本・アジアにとって、示唆に富む。ニューヨーク特派員時代に北朝鮮問題を担当していたこともあり、「外交敗北」は一気読みした。

岩田 三代

(日本経済新聞生活情報部編集委員)

- ① ニッケル・アンド・ダイヤモンド バーバラ・エーレンライク (東洋経済新報社)
- ② ワークライフバランス社会へ 大沢真知子 (岩波書店)
- ③ 西の魔女が死んだ 梨木香歩 (新潮文庫)

女性筆者の3冊をあげてみた。①は米国のジャーナリストが低賃金労働を自ら体験し「ワーキング・プア」の実態を浮かび上がらせた労作。②は低賃金の非正社員になるか長時間労働の正社員を選ぶかを迫る社会に疑問を呈し、新しい生き方を提言する。どちらも足元からの問題提起だ。③は仕事からみの本を読み疲れた時に。私はむしろこちらの読書が主。人と自然の優しさが伝わってきてほっとする。

千野 境子

(産経新聞論説委員長)

- ① 朴正熙、最後の一日 趙甲濟 (草思社)
- ② 作家が死ぬと時代が変わる 粕谷一希 (日本経済新聞社)
- ③ カンガ・コレクシヨン 織本知英子編 (連合出版)

韓国屈指のジャーナリストが朴正熙大統領の最後を渾身の力で再現した。韓国現代史の深い闇、屹立する朴正熙と側近たちの興亡は息をもつかせない。時代を語る。これまた名編集者と登場する言論人の魅力とで戦後言論史が活写された。いまや「首相が代わると時代が変わる」か。カンガは東アフリカの一枚布。豊かな色彩と模様になワヒリ語の語句がプリントされている。単純にして深遠な文言がアフリカならではの。



■永井多恵子

(NHK副会長)

①真相

グレッグ・ダイク (NHK出版)

②パースデイ・ストーリーーズ

村上春樹編訳 (中央公論新社)

③陰日向に咲く

劇団ひとり (幻冬舎)

何といってもおもしろかったのはBBC元会長グレッグ・ダイクの「真相」、イラク戦争報道をめぐる政治権力との闘いが、辛辣な人物批評をまじえて語られている。「パースデイ」は村上春樹の感性で選択された13編の誕生日にまつわる短編集、「翻訳」次第で原文のリズムがこれほどみずみずしく伝わるものかと思う。「陰日向」は格差社会の底辺に生きる人々の気分を知る書、諸兄にはぜひお薦めしたい。

■井田 由美

(日本テレビ解説委員)

①遊覧日記

武田百合子 (ちくま文庫)

②日本語の歴史

山口仲美 (岩波新書)

③戦場でメシを食う

佐藤和孝 (新潮新書)

童女のような観察眼と、老婆のような描写力で、街と人間をまるとらえた「遊覧日記」。日本語という、細かい道具のいっばい詰まった箱を、楽しくあざやかに整理整頓した「日本語の歴史」。現地取材とは、胃袋もそこにあるということ。食の話で、戦火の中の人々をぐっと私たちに引き寄せる「戦場でメシを食う」。小さなことに着目して、大きな世界を浮かび上がらせてくれる本が、私は好きです。

■田丸美寿々

(TBS・キャスター)

①打ちのめされるようなすごい本

米原万里 (文藝春秋)

②まだ生きている

佐藤愛子 (文藝春秋)

③「いま」に在ることの恥

辺見庸 (毎日新聞社)

怒りはエネルギーである。別の言い方をすれば、怒るためにはエネルギーが要る。この3冊の著者たちはみなそれぞれに今という時代に怒りを抱えながら、生きることに恥を忘れず、品性とは何かを熟知している。読後はまず爽快な気持ちになり、次に安穩と生きている自分を叱咤してしまう。大好きだった米原さんが亡くなってしまわれたのは本当に悲しい。彼女の爽やかな怒りと素晴らしい機知にもっと触れていたかった。

■安藤 優子

(フジテレビ・キャスター)

①マオ 上下巻

ユン・チアン (講談社)

②外交を喧嘩にした男

読売新聞政治部 (新潮社)

③中原の虹 一巻

浅田次郎 (講談社)

圧倒的な取材力と構成力で毛沢東の実像を暴くユン・チアンの筆致に容赦なしの「マオ」。当然、議論を呼んでいるが面白さは右に出るものなし。小泉政権終焉であまた出版された「小泉本」。なかでも小泉外交の息詰まる緊張感を満載した「外交を喧嘩にした男」。これまた取材の厚みを感じた。そして、「中原の虹」は、大好きな浅田次郎さんの張作霖物語。たくみなストーリー・テリングでもう釘付け。早く二巻を読みたい。

■小宮 悦子

(テレビ朝日・キャスター)

①格差社会 何が問題なのか

橋本俊詔 (岩波新書)

②新型インフルエンザ 世界がふるえる日

山本太郎 (岩波新書)

③マグレブ 複数文化のトポス

アブデルケビル・ハティビ (青土社)

本番に向けた資料の山を片付けて深夜、ようやく本を手にする毎日。①と②はともに「今そこにある危機」を共有するための良質な手引きだ。「私たちは大きな格差の存在する世界に生きている。それでも一人ひとりの命の重さには変わりはない」。立ち向かう方法は、ある。この夏、モロッコを旅した。多様な文化の交差点で、人々はどう生きてきたか。日本人の想像力をはるかに超えた思索のダイナミズムを体験する。

■小谷真生子

(テレビ東京・キャスター)

①シリコンバレー精神 グーグルを生むビジネス風土

梅田望夫 (ちくま文庫)

②ニュースキャスター エド・マローが報道した現代史

田草川弘 (中公新書)

③The REAL DEAL Sandy Well (Warner Business)

「シリコンバレー」は「ウェブ進化論」のITの未来についてでなく、IT信奉者のITをみつめる視点の変遷が面白い。「ニュースキャスター」はテレビを通じ米の赤狩りを糾弾したエド・マローの信念に、テレビ報道とは、を考える。③は洋書。金融を事業化した先駆的存在(シティーグループ前トップ)ワイル氏の半生を綴った自叙伝。――「現代を生きる」を考える時、別の角度からの新味が加わる3冊です。



# 政局の流れをつくる達人

—川島自民党副総裁に学んだこと—



海老沢 勝二

「政界は一寸先、闇だよ」と政治家や記者たちを煙にまき、政界の舞台回しをしていた自民党の川島正次郎副総裁を担当し、政治の見方などを学ぶ機会を得た一人である。

当時の政権は戦後派で官僚出身の池田勇人、佐藤栄作の時代で比較的政局が安定した中、所得倍増、高度経済成長期に入っていた。そして、1955（昭和30）年の社会党統一と保守合同によるいわゆる55年体制、それに中選挙区制のもと、政局は自民党が主導権を握り派閥全盛時代であった。

人間3人集まれば、派閥ができると言われるが、人間社会はいつの時代でもどこでも何らかの形で派閥が生まれ、その争いが絶えない歴史である。この派閥の功罪が象徴的に取りあげられるのが政界である。

自民党の歴史をみると、これまでだれでも政権の座につくと派閥解消を唱えたが、これは党内の派閥の力が弱まり、なくなることが自政権の利益につながるからである。だが現実には、派閥は解消されず、合従連衡・離合集散をくり返しながら振り子の原理よろしく、つまり政権のたらい回しともいえるべき芸当で長い間、政権を維持してきたわけである。まさに自民党は派閥の力関係にもとづく派閥の連立政権であった。

この派閥のほかに、当時の自民党は政局運営の対立軸として、戦前派對戦後派、党内派對官僚派、保守本流對保守傍流、タカ派對ハト派、主流派對反主流などのレットテルをはり、これに人間の本性である嫉妬や妬みなども加わって、激しい政権抗争を続けてきたのである。

このように日本の政局を動かしているのは厳然として派閥である以上、各社とも政治部記者は何らかの形で派閥に関わる。私は外務省や首相官邸も担当するかたわら、川島副総裁を頭領とする川島派（交友クラブ）を中心に中間派を受け持った。

カンと「読み」

当時の派閥は池田、佐藤、河野、大野の大派閥ほか、総裁候補を擁しない中小の中間派で成り立っていた。党内ナンバー1の川島副総裁は新聞記者出身で、政友会から昭和3年に千葉1区で初当選した戦前派の最後の党人政治家で、岸内閣時代には幹事長を、池田、佐藤両内閣では副総裁をつとめた。いつも「政局の安定なくして経済の発展・成長なし」

と「政局の安定」を大義名分にかかげ、党内の対立をできるだけ避け、融和と結束をはかろうと、調整役としていわゆる「根回し」に飛び回っていた。

「政治は妥協である」と緒方竹虎副総理は述べ、大野伴睦副総裁は「政治は足して2で割るものだ」と言っていた。これは長年の経験にもとづくお二人の実感であったと思う。川島副総裁も利害がからみ対立する意見を聞き、大局観をもって調整を進めていたが、判断・決断は速くをモットーにしていた。

判断・決断するにあたっては確度の高い良質な情報が多く集まらなければならぬのは当然であり、川島副総裁のもとには常に豊富な情報が入っていた。それは川島派が20数名の小派閥であったものの、その人柄や長い政治生活で各界各層に多くの人脈を築いており、他派閥にも親しい議員や面倒をみた議員をかかえていたからである。政治家の要件のひとつに情報収集能力が欠かせないことを学んだ次第である。

一方、多くの場合、党内への根回し、調整、人事など重要案件については謀（はかりごと）は密に、行動は敏速に行い、私ども記者たちに知られないようにすることであった。



調整の内容や人事が事前にもれると失敗するし、まとまるものもまとまらない事態になってしまうからである。当時、淡島（佐藤邸）、大森（川島邸）に特ダネなしといわれたものだ。影響力の大きい最高権力者だけに、肝心なことを直接話法で言うことはなかったが、何となくそれと感ぜさせるものはあった。

このため、その生活や行動パターン、人脈、話す表情、クセなどを覚えるなど日ごろの努力に加え、カンと「読み」を養うことが大事であった。総論の政治家・川島副総裁は肝心なことになると「政界は一寸先は闇だよ」という格言を持ち出した。特に権力闘争の場である政界ではいつ何が起るか分からない、人間も心の奥底まで見通すことは難しい。したがって物事は最後の土壇場まで、つまり下駄をはくまで、札（ふだ）をあけるまで分からないものだ。だから、これは思い込みや希望的観測、予断を持って判断せず、慎重に対処した方がよいという意味だと私はみていた。

### 幻の特ダネ 〱 降格人事

ここで幻の特ダネをひとつ取りあげてみる。昭和43年11月、佐藤3選

後の内閣改造人事で木村俊夫官房長官を格下げして副長官に、後任の新長官に保利茂建設相をあてるというまさにサブプライズ人事のことである。この人事構想は残念ながら川島副総裁から直接とれなかったが、毎晩のように通っていた副総裁側近の藤枝泉介議員から得たものだ。昼間の佐藤・川島会談の内容を取材することができたのだ。

この特ダネをデスクにあげたが「そんな人事はあり得ない」とボツにされてしまった。人事はどこでも任命権者の専権事項であり、この場合、まず佐藤総理の立場にたつて考えるべきであった。つまり、人事取材は思い込みや前例、固定観念にとらわれないことである。

これも私の第一線の記者時代のこと。昭和47年の「角福戦争」とともに脳裏にやきついていく政権抗争は、昭和44年の暮れの総選挙で自民党が300議席を上回る大勝をした後の、昭和45年の佐藤4選問題である。自民党内では「人心一新のため引退すべきだ」「沖繩返還を成し遂げた後でよい」などの意見が出ていた。こうした中で注目すべきことは、佐藤3選の際は慎重に対処した川島副総裁が、今回は早い段階から先頭に立って、佐藤4選ムードづくりに

乗り出したことだ。

まず表面上、副総裁が接触したのは、原則的に佐藤4選反対を表明していた、中間派の石井光次郎元衆議院議長であった。真夏の8月17日、札幌市にかつて北海道開発庁長官をつとめた元閣僚が集まった機会をとらえて、それも同行記者団の前で公開の形で川島・石井会談を開いた。

### 達人の最後の大仕事

この時の模様を石井元議長が「川島正次郎追想録」の中で詳しく書いている。その一部を引用すると、まず石井氏が佐藤4選反対論を述べた後、「川島君は『石井君の言うような人心一新の必要はなく、後継者たちはまだ十分に育っておるように思えぬ』と、4選支持の意向をはじめて発表した。

つけ加えて『石井君と僕は全然違ったことを言っておるようだが、お互いに古い政治家だからよく分かっている、結局同じようなことを言っておるんだよ』と私をかえり見て笑っていたことを思い出す」と、石井氏は記している。

この川島・石井会談は人間の機微を知りつくした川島副総裁が十分計算した上で、マスコミ向けに仕掛け

た一種の政治的演出であり、政治ショーであった。これが佐藤4選への大きな潮流をつくるきっかけになった。

このように川島副総裁が機先を制して早め、早めに布石を打ったのは、「政局の安定のため」という大義名分と政略的には政権交代の時期を遅らせることによって、一歩先んじていた福田赳夫氏の動きを鈍らせるとともに、この間に盟友の田中角栄氏の力を蓄えさせて、田中政権への道筋をつくっておこうという計算と思惑があったと思う。

そして昭和45年10月29日の党大会で、構想通り佐藤総理が対抗馬の木武夫氏をおさえて4選を果たした。その11日後、「老人パワーは挑戦する」と外交課題にも意欲的に取り組んできた川島副総裁は、佐藤内閣が7年目に入った11月9日の朝、80歳、生涯現役で長い政治生活を閉じられた。

私の10月29日付のメモ帳に川島副総裁の最後の言葉として「これで僕の仕事は終わった」と書いてあった。

えびさわ・かつじ会員 1934年生まれ 57年NHK入局 政治部長 報道局長 副会長 会長 ABU (アジア・太平洋放送連合) 会長 現在 読売新聞調査研究本部顧問 横網審議委員会委員長代行 杏林大学 客員教授など



## △暦ナビVセンター

## 総勢7人 業界唯一の職場です

▼小林 善太  
(共同通信社)

この原稿を書くよう依頼の電話をもらったのは「ニュース予定 2007年版」という本作りで最終稿を出したその当日だった。ヤマ場を越えて気分が「ハイ」になっていたせいだろう、ほとんど何も考えずに引き受けてしまった。受話器を置いて、

このページが第一線記者のビビッドな現場報告の場だった、と思い至ったが後の祭り。まるで地味なわが職場の話などなじむのだろうか、と後悔しつつ「本の宣伝になるかも…」という不純な気持ちで書いている。

## ■1年間の予定が一目瞭然

恐らく同業で、私と同じ肩書の方はおられないだろう。職場は「予定センター」という。最近定年を迎え、業務委託になったOBを含め総勢7人。平均年齢は極めて高い。仕事の中心にあるのは「暦ナビ」(商標登録済み)と名付けた予定データベースのシステムだ。全社的に各種予定を

一元管理する目的で2002年8月に運用を開始した。

記者からデスクまで全員がアクセスして情報を共有することが可能な画期的なシステム。社のホームページ、株式会社共同の商品など展開は多岐にわたる。もちろん、主たる目的は加盟社・契約社へのサービスで、このデータを電文に変換して日(主として放送局用)、週(一覧表と電文)、月(電文)、年(本)と各単位の情報をさまざまな形で配信するのがわれわれの仕事だ。03年12月からは内容の一部を加盟社に公開している。

今も、記者クラブから届いたはがきの「会合のお知らせ」で「キルシユ国際刑事裁判所長 記者会見」をデータとして入力したところ。

「暦ナビ」の入力画面でタイトル、期日、時間、場所のほかジャンル、重要度(加工する際、これらが大きな意味を持つ)などを付与してサーバーに入れる。さらに校閲画面を開

いてチェック。校閲はデスク役の次長の仕事なのだが、現在はいないため、私の役目になっている。すべての素データは校閲を経なければ本データにならない仕組みで、全国的にこうした作業をすることで、共同の予定原稿の素材ができるわけだ。

## ■内外の支社局あげて予定発掘

もともと「ニュース予定」は、放送局用に資料として配布していたもので、職場の資料棚には昭和50年代からの分が残っている。「ニュース便利帳」「NEWSカレンダー」などと名前を変え、2001年に市販化に移行するのに合わせ「ニュース予定」となり、今日に至っている。

作業は9月上旬に国内外の各支社局にデータ入力の要請をするところから始まる。スタッフ6人がそれぞれ2カ月分を担当。1日1ページの構成なので項目が少ないと白い部分が目立ってしまうから、それぞれが予定の発掘に努める。

データの収集では官公庁にも協力を依頼、内容の充実を目指しているが、予算編成前とあってなかなか難しい。

本の性格上、12月の下旬には書店に並ぶようにしなければならず、実質の作業期間は約2カ月。例年、校

閲など人手が足りないところはOBにアルバイトとして手伝っていただいている。

## ■更新情報はオンラインで

この後は本作りで入力したデータを基本にして、手直し、追加の作業がひたすら続く。共同が配信した全記事、新聞各紙の毎日の点検が基本だ。

「12月2日」を例にとると、「2006年版」の本では13項目なのに対し、11月末現在、「暦ナビ」にはスポーツを含めると100項目以上が登録されている。「当日」が来るまで可能な限り充実に努めるが、一つの区切りになるのが毎月22、23日ごろに配信する「月間予定」だ。

一般の予定以外にも「美術・博物館」「展示・見本市」などジャンル別に分けている。この電文は、加盟社に届けた後、本の出版元である株式会社共同の専用のサーバーに入る。購入者には、ここに無料でアクセスすることで最新のデータを確認してもらう、というサービスがこの本の「売り」になっている。

こばやし・ぜんた 1971年入社 運動部 整理部などを経て熊本支局長 ニュースセンター整理部長 05年10月から予定センター長



新興国際リゾート

# 豪州マネーで地価上昇 ヤマとマチの格差

▶ 宇治橋 元春  
(北海道新聞社)



「くつちゃん」。アイヌ語地名に由来する難読地名の倶知安町が、9月19日の都道府県地価公表以来、注目を集めている。「景気がいいんだね」。全国から何本も電話をもらったという商店主は「あれはヤマ(スキー場)の話。マチ(商店街)はがけつぷちだよ」と苦り切る。

1平方メートル当たり「1万6000円」と「2万9000円」。

町内2カ所の何の変哲もない地価だが、「前年比」という物差しをあてると、前者「ひらふ地区」は上昇率33.3%で住宅地全国一、後者「駅前通り」は下落率15.9%で商業地

ワースト10。車で20分も離れていないが、両極の顔を見せつける。

ひらふは、パウダースノーの「ニセコ」として知られるが、ここ数年の冬は「オージー村」に。14年前にひらふに移住してきたロス・フィンドレーさん(42)が、口コミで豪州一倶知安の流れをつくった。「ニセコの雪は本物」。豪州に戻るたび見ず知らずのスキーヤーに語り続けたのが実った。国交省の観光カリスマにも選ばれたほどだ。

さらに加速させたのが、2001年9月11日、世界を震撼させた米国同時多発テロ。カナダのリゾート地・ウイスラーを目指していた豪州人は



羊蹄山が雪を被っても 今冬の完成を目指して進む  
コンドミニアム建設工事

一転、安全なゲレンデを求めてひらふへ。400人前後だった入りこみは、02年度650人を記録、05年度はさらに10倍以上の7700人。今冬は1万人が視野に入る。

観光客が動けば企業が動く。豪州マネーが流入し、地価が上がる。

「北海道トラックス」は、今冬完成の5階建て36戸も含め大小21の物件を販売。手がけ始めた03年ごろと比べると、地価は3倍から場所によっては5、6倍に跳ね上がったが、サイモン・ロビンソン社長(46)は「欧米のリゾート地に比べると、まだ割安」と強気。別の豪州資本も総事業費60億円、500億円という計画を次々と発表する。

「別天地だな」。クレーンが林立するひらふを視察した、町内大手の建設会社社長はため息をつく。

公共事業削減で厳しい経営を強いられる社長だが、目前の光景はかつてのバブルと重なる。コンドミニアム第一号を手がけた倶知安の業者が倒産したこともあり、地元業者は遠くから様子を見かねて動き回っている。

不動産業者も同じだ。大型スパーのシャッターが下りたままの

「駅前通り」。その近くで宅建業の看板を上げる業者は「倶知安ですっと商売していこうと思ったら、ひらふで一儲けはできない」という。地価があまりに高値で「投機の世界。だれかがジョーカーをひく」と指摘する。

急激な国際化に呆然としていた行政も、景観や排雪問題が浮上し、重い腰を上げざるを得なくなっている。しかし、業者間の不協和音に加え、マチとヤマの格差問題も絡むだけに、解決策を探しあぐねている。ゲレンデは安全祈願祭を終え、間もなく銀世界が、そして真夏の南半球からスキーヤーがやってくるのだが…。

うじばし・もとはる 1975年入社  
釧路 苫小牧報道部 生活部 編集本部  
などを経て2005年3月から倶知安支局長

一口メモ 倶知安町

人口 15,784人(10月31日)  
世帯数 7,370世帯(同)  
面積 261平方キロメートル

大半が豪州人だが、外国人登録数も155人に上る。深田久弥の「日本百名山」にも取り上げられている羊蹄山(1898メートル)がマチのシンボル。額縁のように、窓から羊蹄山が見えるように家を建てるのが、町民の知恵になっている。日本一の清流・尻別川がマチの中央を流れ、夏場はラフティングを楽しむ全国の修学旅行生でにぎわう。観光とともに農業が基幹産業で、蒸してバターをのせて食べるジャガイモ「男爵」の生産地としても有名だ。



中川 昭一 自民党政調会長

11・1(水) 昼食会 司会 熊村剛幸理事  
影山日出夫委員 出席 14人

▼渦中の持論を展開

北朝鮮の核実験強行で日本も核武装を目指すのではないかと。実験直後、一部の外国メディアは、日本が明日にでも憲法を改正して核開発に踏み切る可能性がある、というような非現実的な報道をした。



開した。メディアの論調は中川氏擁護と批判に分かれてはいるが、新聞や雑誌、テレビでは核保有論議が花盛りになっている。その中には核保有を肯定する声は皆無に

中川政調会長が日本の核保有の是非を議論する必要性を繰り返し強調していることもあり、日本の安全保障政策に対する各国の関心はかつてなく高まっている。それだけに「外国に誤ったメッセージを送ることで、与党の政策責任者としては極めて不適切だ」と、野党だけでなく与党内からも中川氏への風当たりは強い。

渦中の人となった中川氏は会見でも、核武装した北朝鮮に最も脅威を受けるのは日本であるとし、「この時期に議論しないのであれば、いったいいつするのか。脅威が高まっているからこそ議論が必要」と持論を展開した。

近い。理由は明白で、核保有は核拡散防止条約(NPT) 脱退、それに伴う国連などの対日経済制裁、そして日米同盟の事実上の崩壊を意味するからだ。

核保有が現実的な選択肢になり得るとすれば、米国が孤立主義に陥ってアジア太平洋地域から撤退、日米同盟が機能しなくなるなど、北東アジアの安全保障環境が根幹から崩れた時だろう。だが、少なくとも予見しうる将来においてそのような状況が訪れるとはとても思えない。

中川氏自身そんなことは百も承知だ。その後持論を「封印」したが、議論を巻き起こしたという狙いは見事に当たったのではないか。

共同通信論説委員 安川 壮一

宮家 邦彦 立命館大学客員教授

11・1(水) 「中東ベシック」  
アメリカの中東政策」司会 中井康明委員 出席 60人

▼民主化と安定—同時達成は不可能

恒例の研究会「中東ベシック」は今回、宮家邦彦・立命館大学客員教授を迎え「米国の対中東政策」と題して開かれた。イラク問題が最大の争点となった米中間選挙(11月7日)直前でもあり、時期、テーマともにタイムリーな研究会となった。

宮家氏はまず、「これまでの『中東ベシック』では、他の専門家と一緒に話をさせてもらった。今回は一人。やっと独演会が開けるようになった」と座をなごませた。

米国の中東政策の総論として、宮家氏は、①イスラエルの安全保障②湾岸地域からの市場価格での原油確保の二つを車輪のごとく動かしてきた

が最近、①を重視したことでバランスが崩れた。また、「テロとの戦い」「中東の民主化」といった新たな輪が生まれ、混沌とするようになったと説明した。

各論に入り、イス



ラエルとイスラム教シーア派民兵組織ヒズボラが衝突したレバノン情勢について、宮家氏は「徹夜マーチャンの論理」で説明。「勝っている者は早く終わって帰ろうとするが、負けている者は必ず『もう半チャン』と言う」。つまり、先の紛争で政治的に勝利したヒズボラよりも、イスラエルが「もう一勝負」してくる可能性が高いという分析だ。

イランの核問題に触れた後、イラク情勢について宮家氏は、「米国がタイム・テーブルを作ることは抵抗勢力を元気づける。3分割すればさらに不安定化する。米軍の完全撤退は内戦への道」と、どの安定化案も現実的ではないと断言。

最後に、「民主化と安定を同時に達成することは不可能。米国は民主化をあきらめる時期に来ている」と厳しい見方を示した。外交官として中東、米国双方で勤務した経験を持つ同氏ならではの充実した研究会だった。

毎日新聞外信部 小倉 孝保



潘基文  
次期国連事務総長

11・6(月) 記者会見 司会 若宮啓文  
会員 通訳 徐明珍 出席 216人

▼豊富な経験背景に自信も

第8代国連事務総長として迎えることができ、いささかの感慨を覚える。この2月、当クラブの訪韓取材団は潘外交通商相と会見した。まさにその日に事務総長への立候補表明がなされた。その際「ぜひ当選してアジア、世界のためにご活躍を」と激励したことがあったからだ。



取材団団長の若宮会員(朝日・右)が司会を担当

穏やかな口調は変わらないが、今回は自信がにじみ出ていた。国連への信頼回復、紛争解決への調停、各機関の調和などの公約を挙げながら「事務総長の任期中、リーダーシップを発揮して、人間の尊厳性、世界の平和と安定のため責任を果たしていく」と抱負を語る。国連はパワーポリティックスの渦巻く場である。とくに唯一の超大国である米国との調整は難しい。これについても「国連と米国はお互いを必要としている。両者が調和のとれ

た協力ができる」関係をつくることへの自信をみせた。

根っからの外交官。米国、国連の勤務も長く、難しい局面で橋渡し役、調停役を務めてきた。自信には経験の裏付けがあるのだろう。

しかし、次期事務総長の前に立ちあがる壁は厚く高い。アジアでは北朝鮮の核問題が喫緊の課題だ。分断国家の片方の出身、本国政府が対北融和策をとるなか、かじ取りは難しい。「十数年間、北朝鮮の核問題に深くかかわってきた経験を生かして最善を尽くす」と

いう。まずは「朝鮮半島特使」を任命する。自身の北朝鮮訪問にも意欲を示すが、最初の試金石になる。六カ国協議と緊密な連携をとりつつ、国連の機能を十分に発揮し、朝鮮半島の非核化実現に実力を発揮してほしい。35年ぶりのアジア出身の事務総長への期待は大きい。  
東京新聞論説委員 小林 一博

森本あんり  
国際基督教大学教授

11・6(月) 研究会「アメリカの底流② 宗教史から現代を読む」司会 中井良則会員 出席 97人

▼不寛容は「揺らぎ」に起因

保守化が進んだとされる現在のアメリカ社会の深層を、宗教から読みほぐすことで、理解を助けてくれた研究会だった。



「アメリカと宗教」といえば、メディアはもっぱら、強化化するブッシュ政権へのネオコンなど宗教保守派の影響に焦点をあててきた。だが、2001年の同時テロ後のアメリカが自由の拡大など価値観の押し付けに走り、国内でも安全保障最優先の立場から包容力を失い、不寛容になったとすれば、それは宗教心の強さからではなく、むしろ揺らぎに起因すると指摘する森本教授の説明には、「目からウロコ」の感がある。「信仰に確信のある人は寛容の度

合いが高い。揺らぎが生じている人は不寛容」との説も、「大量の移民が持ち込む多様な文化や宗教を前に狼狽し、アイデンティティーの危機」を感じているアメリカが、自らのコアにつきささる痛みを感じているとの解説で納得する。アメリカが危機感を抱いているのはテロによる外からの攻撃だけではないのだ。

世界的紛争解決に乗り込んでいくアメリカについては、いかに宗教的に特殊な国かという視点を提示してくれた。一般的に高い宗教心を示すのは、主にカトリックの国だが、米国ではプロテスタントが優勢だ。豊かになれば、宗教心が薄れる傾向にあるが米国は例外。それは、国民国家が生まれる時代に、はじめから宗教的、神学的な理念によって、建てられた歴史の成り立ちにかかわっている。研究会は米中間選挙の前日の6日におこなわれた。保守派に主導されてきた共和党の敗北を宗教的観点からはどのようなように受けとめられたのか。続編があるなら聞いてみたい。  
読売新聞国際部次長 菱沼 隆雄



ヒュー・リチャードソン

駐日EU大使

11・9(木)記者会見 司会 中井良  
副会長 通訳 友田真理 出席 50人

▼EU拡大のソフトパワー

来年1月1日のブルガリアとルーマニアのEU加盟によって加盟国27カ国、総人口が5億人に迫る欧州連合(EU)の歴史的な第5次拡大のプロセスが完了する。欧州委員会は今後のEU拡大政策に関する戦略報告を11月8日に採択、トルコや、残る西バルカン諸国などの加盟交渉の



進捗状況を洗いなおし、新たな拡大に向けたガイドラインを決めた。

8月に着任した新任のリチャードソン駐日EU代表部大使は会見で「新たな拡大のコンセンサスを再構築したものであり、それは、平和と民主主義、繁栄、法体制の整備、自由というEUの戦略的価値観を共有することだ」とこの「戦略文書」の意義を強調した。

総務や政策調整の主要ポストを歴

任、EUの統合政策を長く推進してきただけに、今後の拡大は「価値観を守る能力を強化し、統合の条件を遵守、新たな負担に耐える体制の整備が必要で、またEUの市民に対する情報提供とコミュニケーションの充実が急務」と訴える。

欧州とイスラム世界の「かけ橋」としての役割が期待されている候補国トルコの加盟交渉について大使は「政治改革が減速、表現の自由や刑法301条(国家侮辱罪)の規定問題、人権、文民統制などが不十分で、改善が必要」としながらも「トルコはNATO加盟以来、50年以上も欧州とイスラム世界との架け橋。EU域内には2千万以上のイスラム教徒がおり、トルコがフェアな改革を進め、人権、法治、民主というEUの価値観を共有して加盟へのプロセスを進展させてほしい」と期待を示す。

「日本の国民にも、人、モノ、資本の移動が自由になるEU拡大のソフトパワーをもっと知ってほしい」と熱く訴えた。日本駐在は1988年以来、二度目。旅が好きで日本の山や自然を愛し、山岳スキーをこなす。

共同通信社長室

山口 光

クロード・マンデイル 国際  
エネルギー機関(IEA)事務局長

11・10(金)記者会見 司会 脇祐三  
委員 通訳 池田薫 出席 72人

▼原子力利用促進で効率性の向上を

原油価格が高止まりする中、先進エネルギー消費国からなる国際エネルギー機関(IEA)の事務局長として、積極的にエネルギー



の持続可能性についてメッセージを発し続ける。超大型ハリケーン「カトリナ」の発生をきっかけに起こった原油価格の高騰局面では、IEA加盟国の備蓄放出を主導して価格の抑制につなげ、存在感を示した。

今回は、2030年までの世界のエネルギー需要を予測した2006年版「世界エネルギー見通し」をテーマに講演し、中国やインドなどを中心とした最近の石炭の需要増を要因に挙げて、世界が新たなエネルギー政策をとらずにエネルギー需要の伸びを放置すると、「2030年ま

で化石燃料を中心に世界で(1次エネルギー)需要は50%伸び、危機を招く」と警鐘を鳴らした。その上で、「エネルギー利用効率の向上がとくに重要」と強調した。

エネルギー効率を高める上で、マンデイル事務局長が指摘したのが原子力発電の利用促進だ。「世界エネルギー見通し」で初めて原子力に1章を割いたことや、ガス発電より原子力発電の方が割安となる点を紹介しつつ、「エネルギーの持続可能な供給を確保する上で原子力は重要だ」としている。

また、油田への投資が十分進まないために原油価格が高止まりしている点に関連しては、「(産油国に)外国からの積極投資を望まない資源ナシヨナリズムの高まりが出てきている」と述べ、産油国側の動きをけん制した。

「直面する問題を説明するのは簡単だが、解決は容易ではない」。ゆっくりかみしめる語り口は、本腰を据えてエネルギー効率の向上に取り組む必要性を強く印象づけた。

読売新聞経済部

西沢 隆之



## アレクサンドル・ロシニコフ 駐日ロシア大使

11・13(月) 昼食会 司会 熊村剛幸理事  
宮田謙一委員 通訳 吉岡ゆき 出席 105人

### ▼お別れ会見 溝の大きさに無念さも

その昔、ゴルバチョフソ連大統領は「日本とソ連は、お互いをそれほど必要としていない。だから、一生懸命に努力しないと関係は疎遠になる」と語ったことがある。



日本各地を訪問し、日本の印象は大きく変わった。日本の「弱点」も見た。そして、日露間の経済交流は在任中に飛躍的に伸びた。「未来については楽観的な見通しを持っている」と説明した。

この言葉を頭においての発言だったのかどうか。「日露はお互いを必要としている」と、大使は何度も繰り返した。

まもなく、「寒い冬のモスクワへ帰任する」。だから、事実上、最後のお別れ会見だった。感情をあまり表に出さず、クールな発言で知られる大使だが、どことなく寂しさと無感が伝わってくる会見でもあった。大使は日本語が話せず、もともと日本を専門としたわけでもない。それだけに特別の覚悟もあったのだろう。赴任の際に「今までとは違った角度から観察し、違った意見をまとめるチャンスだ」と思ったという。

だが、そのあとで、大きくため息をついた。「平和条約は何の進展もなかった……私には不満足だ」と述べた。確かに、領土交渉はほとんど動かなかつた。小泉政権が対露関係に関心を示さず、外務省が鈴木宗男議員のスキヤンダル事件に巻き込まれたことが大きい。大使自身も身動き取れなかつたのが実態だろう。

「日露の歴史はバラよりもトゲが多い」「歴史の記憶はなかなか消えない」「日露交渉というのは両国の外交官にとって破滅的な状況にある。なぜならば双方の世論が問題解決を支持していないからだ」

繰り返すような発言が続いた。結局、大使の総括は、日露の溝は大きかった、という無念さだったのかも知れない。

毎日新聞出身

石郷岡 建

## 伊吹 文明 文部科学相

11・13(月) 記者会見 司会 橋本五郎委員  
出席 136人

### ▼伊吹流理念 正念場はこれから

時の人、といつてよい。この人が文部科学相になるのを待っていたように、教育の諸問題や矛盾が露呈し、「さあ、どうする」と答えと決断を迫ったようだ。

もともと文教族とは遠く、複雑な制度や法規に予備知識などもなかつただろう。むしろそれが幸いしたかもしれない。履修不足問題では、官僚や党の思惑にはさまれて必ずしも意図する通りの結果ではなかつただろうが、正面からスピーディーな処置をし、当面の大混乱は避けた。



また続発する「いじめ自殺」のさなか、文科省に届いた「自殺予告」の手紙を、真偽定かでないまま深夜に緊急発表させた。極めて異例のことである。

「文部省が全力を挙げて対応する姿勢を示すことが大事。いじめの実態調査で子どもから訴えのあったものはすべて包み隠さず出せ、と言っ

ている文科省がその手紙を握っていたというわけにはいかない。いずれにせよ非難を受けるのは私。私が決断して公表した」

こう語ったが、このような率直さが一連の対応でまず好評を得たゆえに、学校の実情を隠さず、むしろ開示する方がいい評価を得られるようにしたい」という考え方も実現できれば成果は大きい。

ただ、教育の問題はどんな手立てをもつても即効性は望めず、結果がなかなか目に見えにくい。試行錯誤の連続でもある。旧大蔵官僚を出自とし、経済政策に通じた文科相だが、合理性や数値だけでは割り切れぬ諸問題にどう粘り腰で取り組めるか。正念場はこれからだろう。

時間が限られ、教育基本法改正について「伊吹流理念」のようなものをつくり聞けなかつたのは残念だった。次の機会を期待したい。

毎日新聞論説委員

玉木 研二



## 嘉田由紀子 滋賀県知事

11・15(水) 記者会見 司会 菅沼登吾委員  
出席 81人

## ▼今回は「政治家」の講義を期待

この仕事を長くしている  
と、ゲストが  
会見で何を話  
すかは大抵想  
像がつく。と  
ころが嘉田由



紀子知事には意表をつかれた。

嘉田知事は7月の知事選で「もつたいない」をキャッチフレーズに東海道新幹線の栗東新駅の建設凍結を訴え、現職を撃破した。当然、凍結問題でどのような見解を示すか、興味津々で待ち構えていた。

だが、嘉田知事は新駅の問題を出さずに、パソコンとパワーポイントを駆使するという新鮮な手法で、ご自身の専門分野である環境社会学から見た琵琶湖と地域社会のかかわりについて話した。会見というより、「嘉田教授の講義」という表現のほうがびびったりだ。

この中で、「3つの『もったない』(滋賀の方言ではこう言う)」として①税金の無駄遣い②自然破壊③若者の育つ力の障害—をあげ、これらの

再生が知事選出馬の動機だったことを明らかにした。持続可能な循環型

社会構築の重要性も強調した。

中身は濃かった。現場で育った学者らしい丁寧な講義に、頭にやや白いものが目立つ

出席者も、遠い昔の学生時代に帰ったかのように聞き入っていたほどだ。

しかしである。やはり「教授」としてだけでは何か物足りない。「知事」「政治家」の立場で、たとえ10分でも凍結問題に対する見解を示してほしかったと感じたのは筆者だけだっただろうか。

むしろ、質疑応答ではこの問題が多く出された。嘉田知事は「今年度末までには結論を出したい」としたものの、自身の明確な考えは示さなかった。今後も地元でのデリケートな交渉が続くだろうから、仕方のない面もあるが、「次回はぜひ「政治家・嘉田由紀子」としての講義を受けてみたいものである。

産経新聞エフシージー総合研究所  
編集委員 縣 忠明

## 西室 泰三 東京証券取引所社長

11・20(月) 昼食会 司会 玉知夫理事  
小孫茂委員 出席 92人

## ▼市場の安定と公正な運営

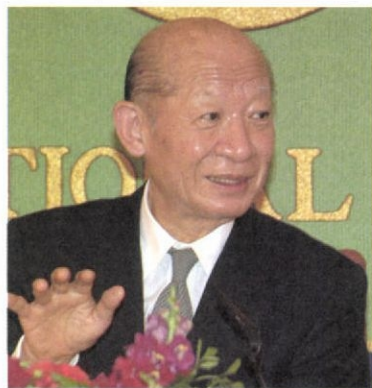
西室氏は当クラブ初登場。東証トップとしては、「20年前の竹内(道雄)理事長以来のこと」と、会見の冒頭、自ら紹介した。

自由主義経済の総本山とも言える証券取引所の代表者が、かくも長期間、クラブと無縁だったとはいささか驚かされた。

取引所や、それを取り巻く環境が穏やかで、クラブ側の興味を引く問題も少なかったのだろうか。

この20年間に、経済環境は激変した。東証も会員制の組織から株式会社に改組し、上場に向けて準備を進めている。欧米の取引所との国際的な市場間競争も激しく、提携、合併など、主要取引所の合従連衡の動きも表面化している。

西室氏は、こうした動きを分かりやすく解説しながら、ニューヨークやロンドンの取引との提携協議の状況にも触れた。



なぜ今、上場が必要かという基本的な問いに、「世界中の取引所が1990年代までは会員制だったが、会員の証券会社が恣意的な取引所運営をするなど弊害が目立ってきた。(上場による)株主の多様化で緊張感のある経営になるはず」と説明。

中立的であるべき取引所が利益追求に走るのではとの懸念には、「新しい持ち株会社の下に、東証と自主規制法人を分ける」方法で対応する。また、上場に向けて取引所として、買収防衛策も検討していることを明らかにした。

いずれにしろ「最大の目的は市場の安定、信頼性のある公正な運営」だと、何度も強調していた。

先進国の証券取引所の間での国際競争の激しさを印象付けた会見だったが、西室氏は「20年も出てこないのではなく、ご要望があれば来年も出てきます」と結んだ。

時事総合研究所代表  
取締役 稲田 好美



フアンガン  
胡鞍鋼

清華大学公共管理学院教授

11・21(火)研究会「中国」② 司会  
藤村幸義委員 通訳 井出寧 出席 94人

▼中国長期計画策定の舞台裏

「これまでの5カ年計画は、経済成長一辺倒だったが、今度の計画は、まったく新しい発想で策定した」

胡鞍鋼教授は、こう述べて、ことしスタートした中国の第11次5カ年計画が、13億の国民の生活向上に重きを置き、また、自国だけでなく近隣諸国とウィンウィン（互利共贏）の関係を築くことをめざすという発想で策定されたことを明らかにした。

この中で、胡教授は、前の5カ年計画について「経済をレベルアップできた」と評価しつつも、都市と農村の格差拡大、地域間の格差拡大、それに自然破壊などの問題点を生じたことを率直に認めた。そして、新計画策定にあたっては、こうした多くの反省点や、新型肺炎(SARS)、各地で発生している騒動や事件、それにWTO加盟後の対外経済関係の変化などを教訓にしたことを明らかにした。

胡鞍鋼教授は、鄧小平氏がかつて打ち出した三段階発展構想（三步走設想）にならって、今後2050年までの新たな時期についても、三段

階の発展をめざすとの構想を示し、新5カ年計画が第1ステップ。来年の党大会ではそれ以降の第2ステップの目標を検討するとの見通しを語った。

また懸案の農業問題については、「農業人口を今の半分の1億7000万人まで減らさなくては、農民は



豊かになれない」との大胆な見解を示すとともに、一人っ子政策の結果、今後迎える高齢化社会への対応については、一足

先に対策を迫られる日本の経験を学びたいとの考えを示した。

胡鞍鋼教授は、中国政府の政策決定にかかわる主要なブレインであり、普段は知りえない、計画策定の舞台裏が、ひしひしと伝わってくる熱のこもった研究会となった。

NHK解説主幹

加藤 青延

チャールズ・レイク  
在日米商工会議所会頭

11・22(水) 記者会見 司会  
小孫茂委員 出席 59人

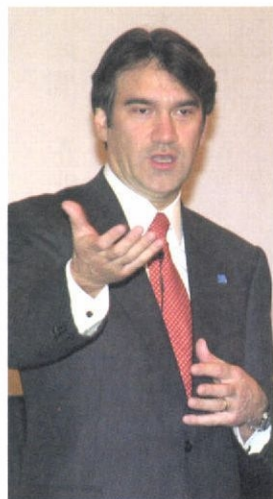
▼ソフト路線の日米協議

90年代の日米貿易摩擦が激しいころ、米通商代表部(USTR)の日本部長として交渉の最前線に立った。日本政府にとって、さぞかし手強いタフネゴシエーターだったのだろう。

44歳のいまは、如才なく、物腰がやわらかい、有能な経営者の顔だ。流暢で丁寧な日本語がその印象を一層強めている。06年初めに在日米商工会議所の会頭に就任してまとめたビジネス白書について、「対日要求にかつてのような凄みはありませんね」と聞かれ、「そういう時代ではありません」と答えた。

演壇を歩き回りながら1時間余にわたって熱心に説いた日米の課題。

その結論は「自由貿易協定(FTA)や経済連携協定(EPA)による日



米経済統合をめざすべきだ」だった。ちようどAPEC首脳会議で、ブッシュ大統領がアジア太平洋FTAを提案したタイミングだけに、その意義を考えさせられた。

「最近、日米には激しい経済摩擦がなくなった。だからよかった、で終わってしまった方がいいのか」。そう言うレイク氏の主張には説得力もある。世界でFTA交渉が次々と始まっているのに、「日米同盟」とうたいあげる世界1、2位の経済大国がFTA交渉を始めなくていいのか。閣僚級の経済協議が米中にあり、日中でも設置が決まったのに、なぜ日米にはないのか。そんな疑問を抱いていた人も少なくないのではないか。

とはいえ、民主党が多数派を占めた米議会のもとで、果たしてレイク氏が描くようなソフト路線の日米協議になるのかどうか。かつての強硬な米政府の交渉姿勢の記憶が鮮明とあって、どうしても警戒心を抱いてしまうが、中長期的には避けられない課題だろう。

朝日新聞経済部次長

原 真人



## ドナルド・デ・ガニエ 世界HIV陽性者ネットワーク創設者

11・28(火)研究会「HIV/エイズ」  
② 司会 宮田一雄委員 通訳 澄田  
美都子 出席 25人

## ▼陽性者の声をエイズ政策に反映

エイズの原因となるHIV(ヒト免疫不全ウイルス)に感染して生きるHIV陽性者は年々、増加しており、国連推定では3950万人に達している。それは、HIV感染がいまなお世界中で拡大していることを示すと同時に、治療やケアの進歩により、陽性者が長く生きられるようになったことの反映でもある。

デ・ガニエさんは1986年にエイズと診断され、すでに20年間、HIV陽性者として生きている。89年にモントリオールで開かれた第5回国際エイズ会議では、陽性者として初めて組織委に参加し、閉会式でスピーチを行った。それがきっかけで翌年、世界HIV陽性者ネットワーク(GNPN+)が発足している。



エイズの流行の最大の当事者がHIV陽性者であることは、いまさら当然とされている

が、当時は国際会議で陽性者が発言するだけでも大変なことだった。デ・ガニエさんは陽性者の声をエイズ政策に反映させ、地球規模のエイズとの闘いを推進してきた功労者の一人である。

94年に横浜で開かれた第10回国際エイズ会議で有力な共催者として会議の成功を支えるなど、日本にもたびたび訪れている。今回は12月1日の世界エイズ・デーに東京で開かれていた第20回日本エイズ学会学術集会以て記念講演を行った。

「日本の陽性者は表に出ることを望まない。偏見と差別を恐れ、職を失うことを恐れている。このような状態が続くと、身近な人が感染して初めて現実を知ることになる」

日本の現状にも詳しいだけに、評価は厳しい。カナダとフランスの2つの国籍を持つデ・ガニエさんは感染を知った当時、カナダ放送のプロデューサーだったとも語った。誰もが感染しうることで、メディアは持続的に取り組む必要があることを伝えるメッセージでもあった。

産経新聞編集長

宮田 一雄

## 本間 正明 政府税調会長

11・29(水)記者会見 司会 小孫茂委員  
出席 129人

## ▼税制は民主主義のリトマス紙

2007年度の税制改正答申の提出を2日後に控えた記者会見。本間氏は冒頭「答申についての質疑はご遠慮いただきたい」とくぎを刺したが、時間がたつにつれ、法人税率引き下げの必要性を説く口調に熱がこもっていった。



「成長重視」の安倍政権から税調会長の指名を受けた本間氏は「欧州の法人実効税率は30%台。(約40%の)日本は中、長期的には見直しが必要だ」と強調。ただ、この日は「企業が栄えれば個人がどうなってもいいとは思っていない」と念を押すことも忘れなかった。

本間氏は11月7日に政府税調会長に就任したばかりだが、すでに「企業優遇」との批判も浴びていた。それだけに会見では「企業が継続的に成長することが重要だ。景気が良くなれば労働分配率は上がっていく」

などと繰り返し強調した。

説得力のある主張だったが、気になる点もあった。一つは減税を含む成長戦略で持続的な経済成長が可能になるとしても「短期的な景気の循環にどう対処するのか」との疑問には明快な答えを出さなかったことだ。政治家や政権は、目の前の課題をクリアしなければ「その先」を語る事が難しくなる。

また「名目経済成長率が3%になれば、家計に好影響が波及するという具体的なデータはあるか」との質問に対し「(経済成長率が上がれば労働分配率も上がるということに)確信は持てない」などと回答。成長路線への信頼に不安感を残した。

「税制は民主主義のリトマス試験紙。国民に開かれた税調を目指す」との言葉には力強さを感じた。「やらせでないタウンミーティングをやりたい」という意気込みを今後も持ち続けてほしい。

東京新聞経済部 池井戸 聡



## リレーエッセー

OPECとの  
出会い④

英国ロンドンを足場に1978年春から約2年半、国際会議の取材でヨーロッパから中東・アフリカまで駆け巡った。苦勞したのが石油危機最中のOPEC（石油輸出機構）取材で、中でもジュネーブ総会（79年）はすさまじかった。

当時、世界経済は「石油ショック」に揺さぶられていた。79年6月28、29日に予定されたアジアで初の主要先進国首脳会議（東京サミット）でも、石油輸入抑制策をめぐる消費大国の結束が問われた。ジュネーブ総会の開会はその2日前の26日。つまりサミットはOPECの値上げ決定を待つて協議開始、という手はずだったのだ。ところが、そのOPEC総会がもめにもめた。朝な夕なに会議からふらりと出て来る各石油相たちは「still discussing」(審議継続中)を繰り返すばかり。「早く原稿を」という東京デスクと踊るOPEC総会の板ばさみの中で、朝夕刊に中身の無い原稿を3度4度

とつないでいく苦痛は、経験者にし分かるまい。「日本の新聞はなぜ1日に2度も発行するのだ!」と、天に八つ当たりしたことも。(世界を見渡しても朝夕2度発行する新聞社は皆無だろう)

そんな次第で、総会はついに異例の3日目に突入。時差の関係もあり、OPECの値上げとサミットの輸入抑制策がほぼ同時決定という緊迫の展開となった。その中で日米欧の対立をさばいた東京サミット議長、大

## サミットとのにらみ合い

## ▼伊藤

## 三郎

平首相の労苦は想像に難くない。その翌80年6月、OPECはアルジェ(アルジェリア)総会で原油価格をついに30ドル台まで値上げ、直後に大平首相が急逝する。その10日後、ベネチア・サミットに大平氏の遺影だけが参加したのは異様な光景だった。オイル・ショックの波状攻撃が石油輸入大国を率いる大平氏の寿命を何

日か縮めたのではなかったか。

それから4半世紀。原油価格は当時の2倍を超えて、この夏には一時80ドルにも迫った。この新たな石油危機をどうとらえるか―ある大手商社の幹部研修会で最近配られた「社外秘メモ」を手に入れた。それによると、今回の石油ショックの特徴は、①石油消費が急増する中国など、供給側でなく消費側に原因が②イラク戦争などをめぐる米欧の対立で消費国の結束

にはころびが③価格高騰は石油だけでなく資源全般に④これまでの石油危機は持続5年程度だった。機は持続5年程度だった。が今回はより長期化、つまり「危機の慢性化」の兆候も：さすが日本経済のナビゲーター、と納得させられる内容である。どうやらこの先OPECの動向は、国際情勢を解くカギとしてますます重要となろう。後進の記者諸兄には綿密な取材と鋭い解説を―などと勝手な思いを巡らしていると、OPECとの遭遇にとまどい続けた当時の血がまた騒ぐ。(福山大学客員教授、元朝日新聞記者)

このシリーズ終わり

■会議報告  
第359回企画委員会

(11・8 Cホール)

新委員の長谷川幸洋(東京新聞論説委員)と中島宏(共同出身)を委員長が紹介した後、今後のゲスト候補などを協議した。

出席 宇治委員長、石井、山田、橋本、中井(康)、脇、小孫、春名、長谷川、影山、井田、和田、廣瀬、三好、中島、柴田の各委員。  
第277回会報委員会

(11・10 小会議室)

12月号、1月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、仙石、伊藤、高橋の各委員。  
第169回施設運営委員会

(11・15 小会議室)

9、10月のアラスカ売上と貸室利用状況を事務局から報告した。年末年始の営業・閉室期間(年末は12月29日午後3時まで、新年は4日10時から平常通りオープン)を決めた。

出席 金平委員長、上滝、加藤、梅田、池浦、中村の各委員。  
第351回会員資格委員会

(11・17 大会議室)

12月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 高畑、泉、二藤部、今田の各委員。



●「クラブ賞」候補者の推薦を●

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは1月31日（水）です。

「選考基準」は左記の通りです。  
 ①現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である（現役という意味は現に活動しているということ）で故人は対象としない）  
 ②スクープ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視

される。  
 ③その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由（2000字以内）に参考資料を添えて提出願います。推薦委員会、選考委員会で添付された資料をもとに審査します。詳細は事務局へお問い合わせください。

締切は明年1月末です

マイBOOK マイPR

写説 占領と単独講和

前坂俊之（毎日新聞出身）  
 占領中の昭和24年から、サンフランシスコ講和条約締結（26年）を経て29年まで計6年間の政治、国際状況、経済、社会などの出来事を写真と文章で記録したもの。ちょうど吉田茂首相の6年間の在任期間中で、いま問題となっている米国の押し付け憲法、朝鮮戦争、再軍備、日米安保条約など吉田が戦後日本のフレームを決める重大な決断をしたわけだが、その背景をしっかりと解説した。ワンマン総理の歴史的評価を下す信簿でもある。

（ビジネス社 1785円）

モンゴルのテレビ事情

外務省の招きで来日したオノン内閣報道官ら5人が事務局を訪れ懇談した（11・14）。4人はテレビの経営社や報道幹部。ウランバートルではケーブルテレビ（約80ch）で、公共放送も民放も視聴されている。が、草原のゲルではアンテナが立っているのだろう。民放はこの2、3年で6局から10局へ増えたという。

大相撲は人気番組のひとつ。ことしの6月、大関白鵬もクラブへ来たとき「春場所の朝青龍との優勝決定戦は視聴率93%だった」と語っていた。

テレビの広告は化粧品と住宅・不動産が両横綱。若者のパソコンでの視聴も増えているそうだ。

会員インタビュー



守屋 由紀

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 上席連絡調整官・広報官

駐日事務所での勤務はこととして10年になる。10月から広報官も兼務。

「UNHCRは現在116カ国262カ所で援助活動を行っている。現場の生の情報をできるだけ多く集め、広報していくのが役割という。

予算のほとんどを各国の拠出金に依存しているので、世論の支持のとりつけ、マスメディアとの連携は欠かせない。年間予算は10億米ドル超。

「そのうちの1割強を日本は負担してきたが、ここ数年は、ODA予算削減の影響で減額され、負担率も落ちてきている」。

最近では難民問題といえば、スーダンのダルフルに世界のメディアの関心が集中している。緊急支援は必要だが、アジアの忘れられている難民にも目を向けてもらいたいという。「タイ北西部の難民キャンプには20年以上前にミャンマーから逃れ

た少数民族が約14万人いる。そこで生まれ育ち、そこ以外の生活を知らない子どもも多々いる。ネパールにはネパール系ブータン難民が10万人ほどいる」。

ブータンの難民についてはまったく知らなかった。民族主義的政策をとる政府が90年代初め、ネパール系ブータン人の国籍を奪い、国外へ追放したのが発端のようだ。

何か明るい話題は、と水を向けると、ことしはうれしいニュースが二つあった、と表情が和む。一つはナセン難民賞（1954年創設）を日本人として初めて札幌の富士メガネの金井昭雄会長が受賞したこと。金井さんと同社の社員は20年以上にわたり、10万人を超える難民に視力検査を行い、眼鏡を寄付してきた。

もう一つは、東京のUNHCR職員を主人公にした、『風に舞いあがるビニールシート』（森絵都著）が直木賞をとったこと。「的確な取材で血の通った人間像を生み出してくれたと思う。自分たちの活動を誇りに思えるように描いてくれた」。

この本では、日本人女性職員が迷いながらもアフガン行きを決心するところで終わっている、その後を続編にまとめて欲しい、とも。（石川）



明年2月中旬

ベトナム、インドネシアへ

明年2月、クラブ取材団をベトナム、インドネシアへ派遣するため、関係方面と最終調整をしている。現在のところ、2月中旬以降、1週間程度で日程をづめていく。

WTO加盟で活気づくハノイではチエツト国家主席、ズン首相などとの会見を希望している。キャノンの現地工場ほか国営工場も見たいと考えている。ジャカルタではユドヨノ大統領はじめ経済閣僚との会見、トヨタ、ホンダ、スズキ、デンソーなどが進出している。アセンブリ、部品工場を視察できればと思っている。

日程が固まり次第、新聞、通信、放送各社の編集・報道責任者あてに通知し、参加者を募ることになる。

この企画は地方紙、地方局の編集局長、報道局長の皆さんの希望で始めたもので、これが6回目。例年、地方からは4、5社が参加し、在京主要社のベテラン記者にも加わってもらい、15、20人で団を結成している。

効率よく首脳に会い、現地経済の状況を的確に知ることができ、近隣

諸国との関係で、わが国の政治、経済を考えるよい機会にもなる。

取材・出張費が厳しいのは各社とも同じだろうと思うが、プロの優秀な記者こそが新聞・放送界の本領であり、その育成が責任だと思う。その強化によってこそ他のメディアとの差異も判然とする。

地方会員社にとっては、中軸記者育成プログラムみたいな要素もあるので、ぜひ期待される逸材を派遣されるようお願いしたい。

1月11日はクラブへ行こう

新年の会員懇親会を、11日(木)午後1時から行うことにした。これまで夕刻6時から行ってきたが、ふたつの理由から昼に変えた。ひとつには、大先輩たちの「楽しみなのだ



日経の杉田社長(左)からクラブ賞への寄付金をいただく(11・27)写真=日経

が、最近では夜の会合はどうも」という声に応えた。もうひとつは、この時間なら、夕刊を終えた各社の人たちにも駆けつけてもらえるだろう、との期待から。

新聞、放送の編集・報道幹部や現役記者の足が遠のくのでは、小さな事務局が多少奮闘しても空回り。在京各社の社長さんたちにも、この日ばかりは一記者の気分に戻って、多数出席していただきたい。

創刊130周年でのご寄付

日本経済新聞の杉田亮毅社長から、創刊130周年に際し、クラブ賞基金に300万円寄付していただいた。創刊120周年のときに200万円寄付してもらっている。これは2回目。杉田社長は、副社長時代にクラブの理事長を4年間務めた。

そのときクラブ財政を堅固なものにするためにも、いろいろご指導をいただいているので、安直にこんなことを申しあげてしまった。クラブ賞は、各社からの寄付で運営するのがよいので、高額でなくても結構です。140周年のときも、と。「ウーン、でも岩崎君、そのころは新聞界も本当に大変だよ」。

(専務理事 岩崎玄道)

アンワル大使からのおわび 宮中

晚餐ではリンゴジュースで乾杯したインドネシアのユドヨノ大統領。クラブでの会見は、午後2時だった。離日時刻が正午に早まったため、中止になった。大統領は夫人とともに国賓として11月26日から29日まで滞日。離日直前のクラブ会見が決まっていた▼26日(午後10時)羽田到着の前々日に、ロシアへの出発が2時間早くなったので会見は難しいという連絡が、在京大使館からあった。外務省、先遣隊との打ち合わせや下見もすませたうえで、会見の日取りが決まり、閣議決定した公式日程に入ったものなので、事務局は外務省に会見をなんとか実施するように要請。

渋谷儀典長、坂場外務報道官はじめ南東アジア2課の人たちが週末にかけ懸命に努力してくれた▼が、27日午後、アンワル・インドネシア大使から文書で「大変申しわけないが、中止せざるを得なくなった」という主旨のおわびが届いた。会員のみなさんにも予測できない事情のため、こうなったことを理解していただきたいということだった▼残念な結果になってしまったが、目下、クラブ取材団が同国を訪問する準備を進めているので、大統領会見はそのときまでのお預け。

(玄)



## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われてい  
ます。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてク  
ラブを利用しています。

■ジェミナイ・モバイル・テクノロジーズ社記者発表  
ジェミナイ社は携帯電話向けソフトウェア基盤の製造  
開発企業。3Dバーチャル空間におけるチャットやショ  
ッピングなどを可能にする新しいプラットフォーム  
eXplo<sup>®</sup>を発表した。日本ではソフトバンクモバイルの  
携帯電話に採用されている。(11. 6 宴会場)  
照会先：フォーカスト・コミュニケーションズ  
能宗（ノウソウ）Tel：03-5157-0033

■韓国「真実・和解のための歴史委」委員長記者会見  
「真実・和解のための過去の歴史整理委員会」の宋基  
寅（ソン・ギイン）委員長が、在日韓国人らに情報提供  
を呼びかけるために来日し、会見した。同委員会は盧武  
鉉大統領の提唱で昨年12月に発足。植民地支配下での抗  
日運動や軍事政権下での人権侵害などの実態を調査し、  
関係者の名誉回復を目指す。(11. 7 宴会場)  
照会先：韓国大使館弘報室 Tel：03-5476-3283

■UNDP『人間開発報告書2006』世界同時発表事前  
記者会見 日本の「豊かさ」は7位  
国連開発計画（UNDP）が毎年発行する報告書のう  
ち、日本での関心が高い分野について西本昌二UNDP  
開発政策局長が解説した。教育、健康などもあわせて測  
定する「人間開発指数」で日本は177カ国・地域中7位  
だった。前年は11位と初めてベスト10圏外に後退したが、  
今年は再浮上。(11. 8 大会議室)  
照会先：UNDP東京事務所 <http://www.undp.or.jp/>

■第1回シンポジウム「新政権に注文する！ 第2次地  
方分権改革」（分権型政策制度研究センター主催）  
「いま自治体に何が問われるのか」のテーマで増田寛  
也岩手、石川嘉延静岡、浅野史郎前宮城の各県知事が討  
論した。その後、土屋正忠自民衆院議員、逢坂誠二民主  
衆院議員（前ニセコ町長）、西尾勝東京市政調査会理事  
長らが「これが改革課題だ」と題してパネルディスカッ  
ションした。同センターは知事と学識経験者らでつくる  
政策提言組織。(11. 11 10階ホール)  
照会先：分権型政策制度研究センター <http://www18.ocn.ne.jp/~rcd/>

■第18回「アジア・太平洋賞」表彰式・レセプション  
（毎日新聞社、アジア調査会主催）  
アジア太平洋地域の政治、経済、外交、文化などに関  
する優れた著書をまとめた研究者らに贈られる賞。大賞  
には、軍事政権下のミャンマーの現状をルポした『ミヤ  
ンマーという国への旅』の女性ジャーナリスト、エマ・  
ラーキンさん（36歳・米国籍、バンコク在住）が選ばれ  
た。(11. 16 10階ホール)  
照会先：アジア調査会 Tel：03-3211-1616

■中東調査会 最近のイラク情勢  
大野元裕上席研究員が「米中間選挙後のイラク情勢」  
のテーマで講演した。(11. 20 宴会場)  
照会先：中東調査会 <http://www.meij.or.jp/>

## 新しいOB会員

## ■東京プロ野球記者OBクラブ設立総会

新聞・通信各社でプロ野球取材を担当したOB記者た  
ちがクラブを設立した。親睦を深めるとともに、日本の  
プロ野球界発展のために、セ・パ両リーグやコミッショ  
ナーへのアドバイスも行っていく予定。設立メンバーは  
17社85人。最高齢は95歳の日経OB金子家基さん。(11.  
24 宴会場)

■活字文化シンポジウム「言葉の力と日本の未来」  
（文字・活字文化推進機構設立準備会主催）

北村正任新聞協会会長（毎日社長）ら6人が読書の楽  
しさ、文字や活字に親しむことの大切さを訴え、アピー  
ル文を採択した。(11. 25 10階ホール)  
照会先：同推進機構設立準備会 Tel：03-5211-7282

## ■第1646回放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBの政治記者たちの勉強  
会。定例会場をクラブへ移しての第1回記念として、中  
曽根康弘元首相を迎えた。(11. 30 宴会場)



**バー、レストラン、宴会**

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



**スタンダードジャズ・シリーズ**  
12月は「Over the Rainbow」

カクテルとノン・アルコールの2種類を楽しんでいただくシリーズ。今月のカクテルはアラスカオリジナルの「ミリオン・ダラー」です。ドライジンベースにポートワイン、パインジュース、レモンジュースなどでアレンジしました。ノン・アルコールもお試しくささい。



**ふぐ特別コース(5,880円)がおすすめ**

(07年2月2日まで)

ふぐコースを明年2月初旬までお出ししています。ヒレ酒もおためしくささい。(板長:薬科浩)先付2点 ふううす造り 鯛照焼 ふう唐揚げ ふう鍋と旬の野菜 ふう雑炊 アイスクリーム



**カニづくしコース**

(07年1月9日~3月2日まで)

タラバ、ズワイ、ワタリと3種類のカニを使ったコースを提供します。前菜一品は和風の炙り焼き、スープは中華風と、洋風以外の調理もおたのしみくささい。グラスワインとデザートがついて4,200円です。

(シェフ:黒須修一)



**新年会は個室での宴会プランをご利用くささい**

(07年2月17日まで)

新年会用にお手軽なプラン(飲み物込みで4,500円、部屋代別)を用意しています。1月中旬以降は、まだ空き室がありますので、早めにお申し込みくささい。10人からお受けします。予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。

**年末年始の閉室のお知らせ**

年末の営業は下記の通りです。

- 和食レストラン: 12月29日(金) ランチまで
  - 洋食レストラン: 12月27日(水) まで
  - ラウンジ・事務局: 12月29日(金) 午後3時まで
- \*28、29日は9階レストランで洋食もお出しします。

新年は4日(木)午前10時から平常通りオープンします。

**クラブの電話 ダイヤルイン**

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

**会報委員会**

委員長=住田良能  
委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也  
高橋利行 西田善夫 松本侑壬子  
連絡=長谷川和子 本庄五月  
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

● 新年懇親会は1月11日(木)午後1時から ●

17ページでもご案内しているように、新年恒例の会員懇親会を、初めてお昼に行います。OB会員も現役もより出席しやすい時間帯にということで、これまでの夕方から午後に移しました。

席上、「2006年予想アンケート」の結果発表が行われ、最高得点者に表彰状と記念品が贈られます。来年のアンケートの投票も行われます。また各社に提供をお願いして実施する福引(空くじなし)もお楽しみいただきます。多数の出席をお待ちします。

**新しい会員名簿をご確認ください**

11月1日現在で作成した会員名簿をお送りしました。誤植、変更などお気づきの点がありましたら、事務局へお知らせくささい。

**<訃報>**

蕪沢嘉雄会員(日経出身、88歳)が10月30日心不全のため、福井博孝会員(毎日出身、65歳)が11月9日肝癌のため、西貝福松会員(新聞協会出身、69歳)が同14日肺炎のため、若林誠一会員(NHK解説委員、58歳)が同15日に死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

**<会員現況>法人会員 146社 基本会員 812人**

個人会員 1,643人 法人・個人賛助会員 76社 186人  
特別賛助会員 76人 名誉・功労会員 10人  
計 222社 2727人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

**「会見速記録」: 11月の新規掲載**

- 玉木明 フリーランス「人間のまなざしをもったニュース報道」(06.8.25)
- 金容雲・日韓文化交流会議韓国側座長「韓日関係のこれから」(06.9.8)
- 羽生善治三冠「将棋は日本文化の特異性を反映したもの」(06.10.25)
- ロシュコフ駐日ロシア大使「北東アジア情勢と日ロ関係」(06.11.13)

**今後の行事予定 (12/1 現在)**

- 12.13(水) 15:00~16:30 (10階ホール)  
研究会「若者と教育」水谷修氏(夜回り先生)
- 12.20(水) 12:00~14:00 (10階ホール)  
羅鍾一駐日韓国大使昼食会

**研究会「2007年経済見通し」**

- 1.19(金) イェスパー・コール メリルリンチ日本証券チーフエコノミスト
- 1.24(水) 加藤 出 東短リサーチ・チーフエコノミスト
- 1.29(月) 早川英男 日本銀行調査統計局長
- 1.31(水) 木内登英 野村証券金融経済研究所シニアエコノミスト

\*時間・会場はいずれも15:00~16:30 (10階ホール)

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。



## 写真回廊

撮影

落水

浩樹

(時事通信社  
写真部)



クリスマスのイルミネーションが輝く六本木ヒルズ

## 人間・労働の価値

1月23日、六本木ヒルズの住人・堀江貴文容疑者が逮捕されて、金に明け暮れた06年は幕をあげた。

金だけが価値であるかのように、企業も組織も個人も金儲けにいそしみ、機会があれば金をくすね、やたら金話題を集めた1年だった。とどめは松坂投手のお値段、60億円だろうか。

景気は引き続き拡大しており、11月の月例経済報告で「いざなぎ景気」を超えたのだという。ただし消費には弱さがみられるとも指摘されている。そうだろう。私たち普通の人は、いざなぎを超えといわれても何の実感もない。

実感があるのは格差が確実に広がっていることだ。橘木俊詔京大教授によれば、現代の富裕層とは概ね年収1億円以上を指し、経営者と医者で過半という。一方、フリーターの平均年収はおよそ140万円と計算されている。人間や労働にこんな価値の開きがあるはずがないのに。

今年のノーベル平和賞はグラミン銀行の創設者・ムハマド・ユヌス氏に贈られた。氏は少額融資を通じて、貧困克服を超え、女性に自信と希望を与えた。ところを得れば、金は人間を価値ある存在にし輝かせるのだ。

(有馬真喜子)